

氏 名	三 川 智 央
生 年 月 日	
本 籍	
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	社博甲第 116 号
学位授与の日付	平成 23 年 9 月 27 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	明治初期の社会における「小説」の位相 —『西國立志編』の影響を中心として— (A Study on 'Shousetsu' in the Society of the Early Period of the Meiji Era: Mainly on the Influence of <i>Saigoku Risshihen</i>)
論文審査委員	委員長 杉山 欣也 委 員 西村 聡, 上田 望 高山 知明, 志村 恵 上田 正行（國學院大學）

学 位 論 文 要 旨

1 研究の課題と方法

これまでの近代文学研究において、明治初期を対象とした文学研究は、柳田泉あるいは興津要といった限られた研究者に任せられ、しかも、その後の研究は、こうした先人の業績をそのまま無批判に踏襲するばかりで、この時代を対象とした新たな研究が本格化することは、近年に至るまでなかったと言ってよい。つまり、近代文学の中で、明治初期という時代は、置き去りにされたまま長く等閑視され続けることとなったのであるが、そこには、坪内逍遙の『小説神髓』（明治十八年～明治十九年）を、近代小説あるいは近代文学の始点とする認識が、大きく影響していると思われる。

本論の研究課題は、このような『小説神髓』を基点とした近代文学の枠組みにとらわれずに、あらためて明治初期の社会における「小説」の様相を明らかにすることにある。ただし、ここで誤解のないよう断っておくならば、それは決して明治初期の文学あるいは「小説」の状況を、近世文学あるいは近世の「小説」の単なる延長と見て、近世的価値観から再評価しようというものではない。『小説神髓』を基点とする近代文学史観からすれば、それ以前の明治初期は近代以前と見なされ、あたかも近世の価値観や、それに基づく文学形体が、そのまま一元的に存続していたかのように思い込まれがちである。しかし、こうした一元的な認識ではとらえられない文学をめぐる動きが、明治初期という時代には生じていたものと思われる。それはおそらく、近世からの明らかな変化を意味するという点では〈近代的〉であり、現在一般化している『小説神髓』を基点とした近代文学史観からすれば、とても〈近代的〉とは言いがたい、まさに過渡期とも言える混沌とした時代の中で発生し、その後の新たな展開の土台を形作りながらも、人々の意識の上からは忘れ去られてしまった、そういった動きである。

本論では、明治初期に生じていたと思われるこのような動きの中で、中村正直の『西國立志編』（明治三年～明治四年）が、当時の「小説」あるいは「小説」というジャンルの形成に与えた影響に注目する。『西國立志編』は、イギリスの著述家サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の *Self-Help* を中村が邦訳したものであり、自助の精神によって成功を収めた人々

の伝記と、勤勉・忍耐・節儉・修養といったことの大切さを説く文章から成り立っているが、実は、「小説」に対してもかなりの言及を行っている。しかし、『西國立志編』が表面的には文学あるいは文章についての専門書ではなかったせい、これまでに、『西國立志編』の「小説」論に触れる研究者はいても、それが日本の「小説」概念やジャンルの形成自体にどのように関係したのかを総合的かつ詳細に考察した研究は行われなかった。本論では、この点に着目し、『西國立志編』と「小説」との関わりを明らかにすることから、明治初期の「小説」の実態に迫る。

近世の「小説」や、「小説」に対する人々の認識は、明治十八年の『小説神髓』の登場まで近世のままに維持され、いきなり「歐土の那ベル（小説）」と同等の価値を持つ「小説」へと変化したわけではあるまい。『西國立志編』を手掛かりとすることで、その前提となる時代の動きが明らかになり、それによって、自ずと『小説神髓』の文学史的意義も相対化されるはずである。また、そればかりではない。これまでの近代文学史観は、『小説神髓』以降に出現した「小説」をすべて〈近代小説〉という枠に組み込んでしまうことで、あたかも「小説」というジャンルが自明のものとして存在し始めたかのような錯覚を人々にもたらししていた。しかし、実態は決してそうではなかったはずであり、明治二十年代に入ってから活発化する「小説」をめぐる数々の論争は、確固とした実体を持たないままに揺らぎ続ける「小説」の有り様を、何よりも端的に示している。明治初期の「小説」や文学の動きを捉えることは、こうした『小説神髓』以後の「小説」の実態を解明する手掛かりにもなるはずなのである。

では、『西國立志編』と「小説」の関わりを明らかにし、当時の「小説」の実態に迫るためには、どのような姿勢が必要か。本論のアプローチとして私がたどり着いたのは、時代や社会の変化の中で、当時の人々の認識や価値観に寄り添って、「小説」をめぐる動きや、「小説」の概念自体の変化を考察するという姿勢である。近代的な「小説」というジャンルを自明のものとし、その視点からのみ対象を見渡したとしても、おそらく、何も見えてはこない。文学研究においてまず重要なのは、対象とする出来事の「現在的意義」ではなく、当時の人々の認識に即した「時代的意義」なのである。

2 本論の展開

第一章では、本論への導入として、近世社会から近代社会への過渡期とも言える明治初年代において、「小説」というものが社会の中でどのような状況にあったのかを概観する。具体的には、当時の官立学校の「小説」排除規則を取り上げ、「小説」が「学科ニ係ラサル書籍」の一種として扱われるならまだしも、「風儀ヲ乱シ怠惰ニ流ルハ」有害なものとして取り立てて明記される背景に、当時の「小説」を取り巻く社会の風潮を探っていく。この概観の最後に、中村正直の翻訳書『西國立志編』が、明治初年代の日本人の「小説」に対する意識に多大な影響を与えたものとして浮かび上がり、第二章以降の論考へと発展する。

第二章は、『西國立志編』がどのように明治初期の社会に広がったのかを、出版や流通の状況に着目しつつ明らかにする。明治三年から四年にかけて刊行された『西國立志編』は、「出版部数は明治末年までに百万部に達した」と言われ、「明治時代を通して最大のベストセラー」と評される。しかし、多くの人々が明治の大ベストセラーとして認める書物でありながら、その出版や流通の具体的な状況については、はっきりしない部分が多い。本書が当時の社会に及ぼした具体的な影響を考察する前提として、その広がりの実態を確認する。

第三章では、『西國立志編』が、日本で刊行された翻訳書の中で novel を「小説」と翻訳した最も早い例であることに着目し、その翻訳の状況を詳細に考察する。従来、「小説」という語が novel の翻訳語として日本に一般化するにおいて、坪内逍遙の『小説神髓』が大きな役割を果たしたということを入々は繰り返し指摘してきた。しかし、逍遙が『小説神髓』を公にする十年以上前に、『西國立志編』では、novel の翻訳語として既に「小説」という

語が用いられていた。近世では読本や滑稽本などの戯作を表す語として、一部の人々の間でのみ使用されていた「小説」という漢語が、どのような過程で翻訳語となり、どのようなイメージを伴うものとして当時の人々に受容されていたのかを究明する。

第四章と第五章は、第三章で明らかにしたことを踏まえつつ、まず第四章において、『西國立志編』が「小説」についてどのような概念を提示したのかを、原著 *Self-Help* との比較も行いながら詳しく考察した上で、第五章において、その「小説」概念が、明治初期の社会にどのような影響を与えたのかを具体的に考えてみる。「小説」という語が、文芸の一ジャンルを示す新たな言葉として明治初頭の日本に定着したのには、『西國立志編』が深く関わっていたと考えられるが、従来の研究においてはこのことが顧みられることはなかった。『西國立志編』の「小説」概念と、その社会への影響を考察することで、未だ明らかにされているとは言い難い明治初期の文学の実態に迫る。

第六章から第八章では、明治初期における戯作者たちの具体的な動きに目を向け、その動向を再検討する。明治初期の戯作界を語る際に、以前から注目されてきたのが、明治五年に仮名垣魯文と条野伝平が連名で教部省へ提出したとされる上申書の存在である。柳田泉を始めとする従来の研究者は、この上申書を、戯作者たちが三条の教則を基本とする国教宣伝運動への協力を誓ったものとしてとらえ、これを機に彼らの作風が〈虚〉から〈実〉へ変化したという解釈を行ってきた。しかし、それは当時の実態を精確にとらえたものと言えるのか。まず、第六章では、上申書がどのような状況の中で作成されたのかを、より客観的な史料をもとに究明し、それを踏まえて、第七章、第八章では、当時の戯作の動向に深く関わった〈実〉という価値観が、具体的にはどのようなものであり、どのように生み出されたのかについて検証を行う。さらに、こうした明治初期の戯作の動きの中から生まれた〈事実性〉という価値観が、『小説神髓』出現の前提となる社会状況の形成に繋がっていったことを指摘する。

第九章および第十章は、明治二十二年二月、『都の花』に掲載された嵯峨の屋おむろの「くされたまご」を取り上げる。「くされたまご」は、近代的な「小説」という枠組みを自明のものとする現在の文学研究からは、ほとんどその価値を顧みられることのない作品である。しかし、時代を明治二十二年の発表時にまでさかのぼってみると、その評価は、現在とはまったく異なっていた。近代的観点から見れば、取るに足らない小品でしかない「くされたまご」が、当時においては嵯峨の屋の名声を高め、人々から注目されていたのはなぜか。第九章では、作品自体の意義を時代に即した形で再検討し、また、第十章では、この作品を発端として繰り広げられた、いわゆる「小説論略」論争に着目し、『小説神髓』以後、明治二十年代前半という時代の中で、未だ揺らぎ続ける「小説」の実状を明らかにする。

Abstract

Self-Help was written by Samuel Smiles and published in the U.K. in 1859. After its publication, the book was translated into various languages. It was translated into Japanese by Nakamura Masanao, and was published under the title of *Saigoku Risshihen* from 1870 to 1871. This Japanese version of *Self-Help* had a great deal of influence on the minds of the Japanese people of the early period of the Meiji era, including their concept of 'shousetsu', the Japanese version of the novel. However, not all the roles that *Saigoku Risshihen* played in this era are remembered and appreciated today. In this study, I will analyze the concept of 'shousetsu' presented in *Saigoku Risshihen* and clarify the nature of the influence that the concept of 'shousetsu' had on

the minds of the Japanese people in that era.

論文審査の結果の要旨

三川智央氏の学位論文『明治初期の社会における「小説」の位相—『西国立志編』の影響を中心として』は、明治初期における「小説」をめぐる状況を、サミュエル・スマイルズ *Self-Help* の翻訳である中村正直訳『西国立志編』（明治3（1870）－明治4（1871））における「小説」概念の検討を通して浮き彫りにし、さらにその影響を明治20年代まで辿った研究である。

従来の日本近代文学研究において、明治初期における「小説」について等閑視する状態が続いてきた。それは坪内逍遙『小説神髓』（明治18（1885）－19（1886））を基点とする認識が大きく影響している。すなわち、『小説神髓』を基点とすることでそれ以前の明治初期文学が過渡期と受け止められてきたためである。近年、かかる状況を相対化する機運が生じてきたものの、考察すべき問題は数多く残されている状況にある。

かかる研究状況を踏まえ、本論においては中村正直訳『西国立志編』における「小説」概念の検討によって、この時期における「小説」概念やジャンル形成の様相を総合的かつ詳細に検討している。『西国立志編』は文学あるいは文章についての専門書ではなく、自助の精神によって成功を収めた人々の伝記と勤勉や忍耐、節儉、修養といった徳目の大切さを説く書物であるため、文学研究領域においてその「小説」概念はさほど重視されてきたとは言えない。しかし、『西国立志編』は明治期最大級のベストセラー書であり、教育の場において活用されてきたこともあって、その「小説」概念を検討することは明治初年代の日本における「小説」に対する意識に大きな影響を与えている。

『西国立志編』は *novel* を「小説」と翻訳した最も早い事例であるが、そのことは近世において戯作を意味し、一部の人々のみに使われていた「小説」という語の意味を大きく変え、文芸の一ジャンルを示す新たな言葉として定着する役目を果たすこととなった。また、『西国立志編』および *Self-Help* において「小説」 *novel* は否定的に扱われている。そのことは当時の「小説」観形成に大きな意味をもたらした。その点について、本論では明治5（1873）年に仮名垣魯文と条野伝平が連名で教部省へ提出したとされる上申書の存在を元に、そのような上申書が作成された具体的状況を追うといった具体的かつ丹念な調査によって確認し、当時の戯作の動向にかかわった〈実〉という価値観の由来について分析した。そしてそこで生じた〈事実性〉という価値観が『小説神髓』出現の前提となる状況の形成に繋がったことを指摘している。

さらに本論では、明治22（1889）年、雑誌『都の花』に掲載された嵯峨の屋おむろ「くされたまご」を取り上げる。現在の近代小説観からは顧みられることのない作品であるが、発表当時の状況に遡ることで同時代的な意義を明らかにし、さらにこの作品を発端とする「小説論略」論争の検討によって、揺らぎつづける「小説」概念を分析した。

本論に対して、審査委員会からは、全体の構想及び内容についておおむね妥当との評価を得た一方、以下のような課題点の指摘もなされた。すなわち、具体的な資料等の検証過程に詰め甘さが認められることや、「小説」という言葉の問題と実情とがかならずしも一致するものではないこと、あるいは『西国立志編』訳者の中村正直自身の儒学者としての立場への顧慮が必要であるといった、主に研究対象なり資料なりをどのように受け取るかといった点へのリクエストである。また、本論において意図的に避けた坪内逍遙『小説神髓』をどのように評価するかによって、本論の後半2章で論じられた「くされたまご」および「小説論略」論争が前半部の『西国立志編』における「小説」概念とどのように接続するか変わってくる可能性があることや、スマイルズと中村正直の差異を文化史的に分析する必要性などが

指摘された。

しかしこれらの課題点は本論の構想及び内容に対して否定的に作用するものではなく、むしろこれらの課題を今後検討していくことによって本論の価値はさらに高まる性質のものであり、またそのような課題を近く克服できると信ずるに足る研究手法の確かさを本論自体が有している。これらのことから、本論が博士論文として十分な質を有しているという認識で審査委員全員の見解が一致した。よって合格と判定するものである。